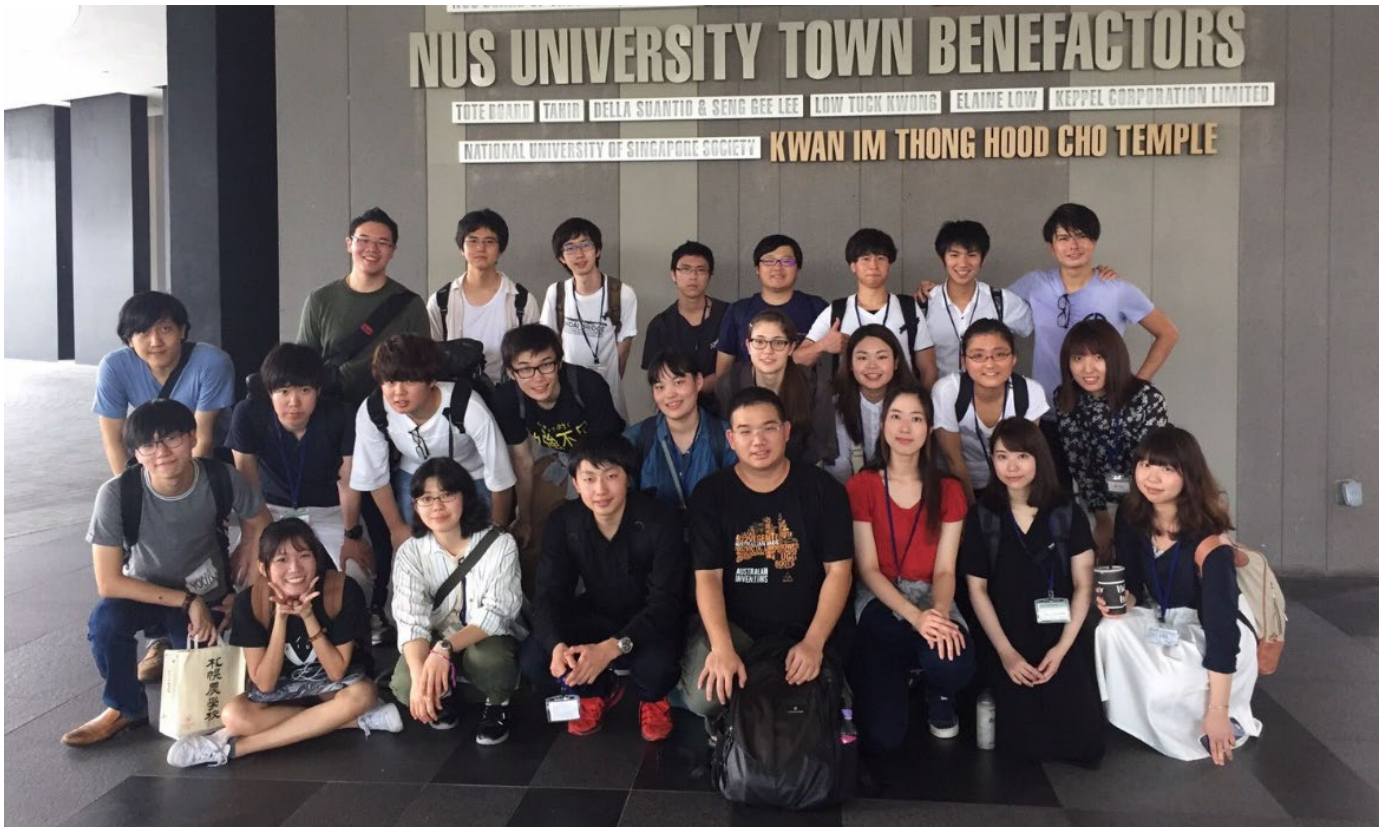
一般教育演習（フレッシュマンセミナー）

グローバル・キャリア・デザイン 5

第 19 回　FSP アジア全体報告書

2017.2.18 – 2.28　　Vietnam & Singapore



©2017 国立大学法人北海道大学

目次

・ファースト・ステップ・プログラム（FSP）とは？ …… 2

・参加メンバー …… 3

・研修日程 …… 5

・研修報告 1：準備授業 …… 7

・研修報告 2：協定校・教育機関訪問 …… 8

<V> International University - Vietnam National University Ho Chi Minh City
<S> Ngee Ann Polytechnic
<S> National University of Singapore（略称：NUS）
<S> Yale-NUS College

・研修報告 3：企業・組織訪問 …… 14

<V> 独立行政法人 国際協力機構（JICA）プロジェクト
ベトナム日本人材協力センター
<V> 特定非営利活動法人 Seed to Table ～ひと・しぜん・くらしつながる～
<V> MSD Vietnam Representative Office
<S> 日本航空株式会社シンガポール支店
<S> 丸紅アセアン会社
<S> Temasek Life Sciences Laboratory, Mechanobiology Institute

・研修報告 4：訪問国調査活動 …… 21

・研修報告 5：全体を通して・事後授業 …… 23

・現地でのエピソード（体験談・失敗談） …… 24

・参加者の声・メッセージ …… 25

・編集後記 …… 27

<V>: ベトナム　<S>: シンガポール

©2017 国立大学法人北海道大学

ファースト・ステップ・プログラム（FSP）とは？

ファースト・ステップ・プログラム（FSP）とは、北海道大学の海外研修プログラムの１つで、授業科目としての名称は「一般教育演習（フレッシュマンセミナー）：グローバル・キャリア・デザイン」。文理を問わず様々な学部から集まった１・２年生が参加し、初めての海外という学生も多いのが特徴です。

10 日～2 週間の研修中には国際機関や国際的に展開している企業・組織を訪れ現地で働く方々と対話を行ったり、現地の協定校・教育機関を訪れ授業体験や学生交流を行ったりと様々な研修が用意されており、グローバルに視野を広げ次の活動へと繋げる一歩を踏むことを目的としています。

私たち参加者が考える FSP の特徴

FSP 最大の特徴のひとつとして挙げられるのが、十数人ほどのチームで活動するということ。これは初めての海外という人にとって安心であるだけでなく、学部も出身地も価値観も異なる様々な仲間とともに異文化の中で時間を過ごすことで、自分という一人の人間が持つ視点からの感動や発見を得るだけでなく、違った視点を持つ仲間から学びを共有できるというメリットを持っています。

また、もうひとつ挙げられるのが、英語を学ぶ「ための」研修ではないということ。一般的な海外研修には現地で英語を学ぶことを第一に掲げているものも多く存在しますが FSP は異なり、現地ではコミュニケーションや訪問先での発見・気づきを通して学びを得ることが重要なのであって、それを達成するための手段のひとつである英語はこのプログラムに参加するということをモチベーションにして各自事前に取り組むという印象が強いです。また、研修で得た学びは将来海外で働くために役立てることもできますし、故郷・日本に持ち帰って国内で役立てることもできます。「グローバル」だけでなく「グローカル」な要素を含んでいることも FSP の特徴ではないかと思います。

2016（平成 28）年度実施のプログラム

夏季

2016 年 8 月 27 日（土）～9 月 11 日（日）	アジア	＜シンガポール・ベトナム 2 か国訪問＞
2016 年 9 月 6 日（火）～9 月 20 日（火）	欧州	＜フィンランド・エストニア 2 か国訪問＞

春季

2017 年 2 月 13 日（月）～2 月 27 日（月）	北米	＜アマースト・N.Y.・ポートランド＞
2017 年 2 月 18 日（土）～2 月 28 日（火）	**アジア**	**＜ベトナム・シンガポール 2 か国訪問＞**
2017 年 3 月 5 日（日）～3 月 19 日（日）	中国	＜上海・杭州・北京＞

本報告書では春季開催のアジアプログラムについて紹介します。同時期開催の北米プログラム・

©2017 国立大学法人北海道大学

中国プログラムについてはそれぞれの報告書をご参照願います。

©2017 国立大学法人北海道大学

参加メンバー紹介

今回の研修に参加したメンバーは 18 名です。初めての海外という学生が 3 分の 1、新渡戸カレッジ生に所属していない学生も 3 分の 1 を占めていることから、「ファースト・ステップ」らしさが表れています。

前列左から

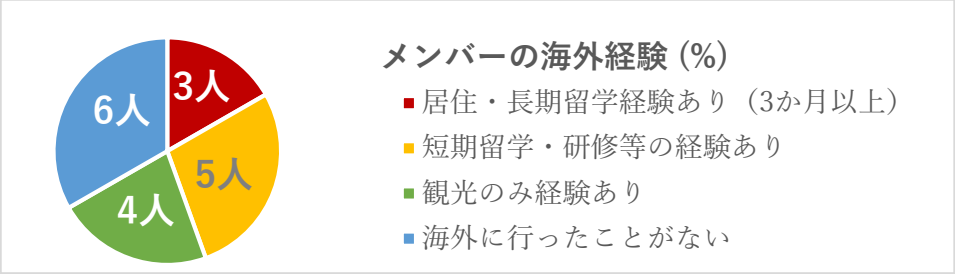
総合理系 1 年	今井 ゆき菜	≪プ≫
文学部 1 年	近江 芹菜	≪プ≫
文学部 1 年	田井 方子	≪総≫
総合理系 1 年	豊島 楽子	≪訪≫
法学部 1 年	早川 梨穂	≪総≫
法学部 2 年	秋山 紗永	≪リーダー≫
法学部 1 年	福井 真依	≪広≫
総合理系 1 年	阿部 悠	≪訪≫
文学部 1 年	神 明里	≪広≫

後列左から

工学部 1 年	山木 聡一郎	≪広≫
経済学部 1 年	柿崎 央登	≪総≫
経済学部 1 年	深瀬 隆也	≪総≫
文学部 1 年	葉柳 響一郎	≪プ≫
総合理系 1 年	戸谷 元拓	≪サブリーダー≫
水産学部 1 年	佐々木 駿	≪訪≫
理学部 2 年	日下 皓太郎	≪訪≫
工学部 2 年	竹鼻 大貴	≪総≫
総合理系 1 年	池谷 航	≪プ≫

※学年は参加当時

引率
国際連携機構　川端 千鶴



©2017 国立大学法人北海道大学

班の概要

メンバーは一人ひとつの役職・班に所属し、活動を行いました。

≪リーダー≫・≪サブリーダー≫
　チーム全体のまとめ役や毎晩のミーティングの司会進行を担当。

≪総≫　総務企画班
　訪問校での学生交流の企画運営、「訪問校のしおり」作成を担当。

≪訪≫　企業訪問班
　訪問する企業・組織についての事前調査・しおり作成、全体での学習会開催、現地での誘導、対話における議事録作成などを担当。

≪プ≫　プレゼンテーション班
　訪問校の学生に日本・北海道・北海道大学について紹介するプレゼンを担当。

≪広≫　記録広報班
　ポスターや Facebook・Twitter を通しての研修報告・広報活動と研修後の帰国報告会での発表、ならびに本報告書の執筆を担当。

FSP　Facebook・Twitter アカウント

「北海道大学　ファースト・ステップ・プログラム」
@1ststepprogram　https://www.facebook.com/1ststepprogram/

「北大 2017 春 FSP@北米中国アジア」
@fsp_171819　https://twitter.com/fsp_171819

記録広報班が中心となって運営しているアカウントです。Facebook は代々共用、Twitter については同時期開催の北米プログラム・中国プログラムと共用となっています。

©2017 国立大学法人北海道大学

研修日程

校：協定校・教育機関訪問

2017 年度春季 FSP アジア 行程表　　訪：企業・組織訪問

	日付	都市・地域	時刻	内容
1	2 月 18 日 (土)	札幌 羽田 成田 ホーチミン	11:00 12:40 17:50 22:25	新千歳空港 発 羽田空港 着 （専用車にて成田へ） 成田空港 発 ホーチミン/タンソンニャット国際空港 着　ホテルへ
2	19 日 (日)	ホーチミン	9:00～ 11:00～ 午後 19:45～	オリエンテーション 戦争証跡博物館 見学 訪問国調査活動 現地学生とともに全員で夕食
3	20 日 (月)	ホーチミン	9:30～ 15:30～	校①　International University - Vietnam National University Ho Chi Minh City 訪問 ＜授業参加・学生交流・プレゼンテーション＞ 訪①　独立行政法人 国際協力機構（JICA）プロジェクト ベトナム日本人材協力センター 訪問
4	21 日 (火)	ベンチェ省	6:00～ 14:30～ 17:00～	訪②　NPO 法人 Seed to Table ベンチェ省ビンダイ郡の農村訪問 ＜有機農家や貧困世帯への訪問、伝統食体験＞ ホーチミン市へ向け出発 訪問国調査活動（20:30 まで。夕食含む）
5	22 日 (水)	ホーチミン	10:00～ 13:30～ 15:00～	訪③　MSD Vietnam Representative Office 訪問 振り返りミーティング 訪問国調査活動（21:00 まで。夕食含む）
6	23 日 (木)	ホーチミン シンガポール	9:10 12:15 14:30～ 19:00～	タンソンニャット国際空港 発 シンガポール/チャンギ国際空港 着 訪④　日本航空株式会社シンガポール支店 訪問（空港内） 全員で夕食
7	24 日 (金)	シンガポール	9:00～ 12:00～ 15:00～	訪⑤　丸紅アセアン会社 訪問 校②　Ngee Ann Polytechnic 訪問 ＜学生交流・プレゼンテーション＞ Ngee Ann Polytechnic 生とともに少人数でアウティング

©2017 国立大学法人北海道大学

	日付	都市・地域	時刻	内容
8	25 日 （土）	シンガポール	 19:00～	訪問国調査活動 道産子会との懇談（夕食会）
9	26 日 （日）	シンガポール	9:00～ 午後	振り返りミーティング 訪問国調査活動（21:00 まで。夕食含む）
10	27 日 （月）	シンガポール	午前 午後 17:15～	訪⑥　Temasek Life Sciences Laboratory 訪問（NUS 内） ＜レクチャー体験・ラボツアー＞ 学③　National University of Singapore（NUS）訪問 ＜NUS 生との昼食・キャンパスツアー＞ 学④　Yale-NUS College 訪問 ＜学生交流・プレゼン・キャンパスツアー＞ 訪問国調査活動（21:00 まで。夕食含む）
11	28 日 （火）	シンガポール 成田 札幌	8:20 16:05 18:55 20:40	チャンギ国際空港 発 成田空港 着（一部解散） 成田空港 発 新千歳空港 着

※時刻は現地時刻

※「訪問国調査活動」とは、各自設定した調査トピックをもとに研修時間外に訪問国各地を訪れ簡単な社会調査を行う活動です。原則 2 人以上で行動し、市場や観光産業に関する調査、博物館や自然保護区への訪問、協定校の学生と街を散策するなど各々に活動を行いました。

宿泊先

ホーチミン：　Bong Sen Hotel Saigon

シンガポール：　Hotel Royal @ Queens

参加費用について

参加費用：19 万円程度　【費用に含まれるもの】航空運賃、宿泊費、車両借り上げ代等

奨学金：日本学生支援機構（JASSO）奨学金（10 万円）が支給される可能性あり。
（受給要件を満たす学生は、JASSO または本学フロンティア基金新渡戸カレッジ奨学金の受給が可能）

©2017 国立大学法人北海道大学

準備授業

参加メンバーが決まり、最初に顔合わせを行ったのが 12 月 6 日。その後翌月にかけて、FSP 参加のうえで必要な情報の共有や海外研修のための様々な準備を行う準備授業が全 7 回、6 講時（18:15-19:45）に行われました。この事前授業のおかげで、海外へはじめて行くという人からも安心だという声が挙がっています。

事前授業日程

2016/12/06	3 プログラム合同	海外研修概要説明、グループ分け
2016/12/08	アジア	班活動説明、第 1 回班活動
2016/12/13	3 プログラム合同	キャリアデザイン、授業課題について
2016/12/15	アジア	訪問国に関する調査
2016/12/20	3 プログラム合同	異文化コミュニケーションについて
2017/01/11	アジア	訪問国における危機管理・危機管理対応
2017/01/19	北米・アジア合同	プレゼンテーションの予行練習・最終確認

海外研修概要説明では、グローバル・キャリア・デザインの「授業」として実施されているこのプログラムにどう取り組むべきなのか、しっかり説明をいただき、チームで守るべきルールについても確認しました。「キャリアデザイン」をどう行っていくか、についても教えていただき、近い将来から遠い将来まで、自分で計画を立てることの手助けとなりそうです。また、このプログラムに参加する目的をはっきりとさせることで、メンバーは参加する意欲をさらに増していました。

（12/13 事前授業にて）

アジアプログラムに参加するうえで不安に感じる点として、衛生面や治安面が挙げられます。しかし、これらの事前授業に参加することで、自分で調べるべき情報のヒントをいただいたので、その不安は解消されました。

（1/11 事前授業にて）

プログラム前に授業があることによって、メンバーとの交流も深めることができました。このプログラムではチームとして行動することが大切なので、メンバー間の信頼関係作りもしっかり行われています。（文責：神）

©2017 国立大学法人北海道大学

International University - Vietnam National University Ho Chi Minh City

第 19 回 FSP アジアが最初に協定校訪問として訪れたのは、ホーチミン中心部から北東に 15km 程の郊外に位置する International University（略称：IU）。この大学は Vietnam National University Ho Chi Min City のメンバーの 1 つで、ベトナムで初めて英語中心で授業展開を行う大学として 2003 年に創設されました。当日は授業を体験したのち、学生とともに昼食・ゲームなどを通して交流しました。

授業参加

IU の学生とともに Environmental Science（環境科学）の授業に参加させていただきました。授業はすべて英語で行われていました。まず、はじめに全員でマダガスカル島の成り立ちおよび独特な自然環境についてのビデオを視聴しました。英語のビデオだったのですが、生徒全員がビデオの内容を理解できるように、ビデオ視聴後に先生からの質問がありました。日本とは違い、積極的に質問に答える学生が多かったのが印象的でした。また、授業の最後には学生からサンゴ礁が失われていることについてのプレゼンテーションがありました。このときにも学生からの質問がたくさんあり、質問と回答でディスカッションのようになっていました。これらの体験を受け、私たちも北海道大学での授業への参加態度について考え直さなければならないと感じました。

学生交流

IU 生とともにお昼ごはんを学食でいただきました。IU 生は、私たちを丁寧に案内してくれました。英語でのコミュニケーションに不安もありましたが、英語やジェスチャーを通じてコミュニケーションを楽しむことができました。

その後行われた学生交流会では、北海道大学・IU 両方からお互いに大学紹介のためのプレゼンテーションを行い、IU 生からは歌のパフォーマンスもありました。私たちからの提案で、自己紹介をして学生同士名前、趣味、好きな食べ物を覚えるゲームやジェスチャーゲームをして、さらに学生間の交流を深めました。　（文責：神）

（学生交流後、IU 生とともに）

©2017 国立大学法人北海道大学

Ngee Ann Polytechnic

シンガポールで最初に訪れたのは、MRT（都市鉄道）の郊外の駅近くに位置する Ngee Ann Polytechnic（以下 NP）。Polytechnic とは日本の高専に相当する教育機関で、交流した学生は私たちと同年代が中心でした。

学生交流

NP では日本語を学ぶ約 90 名の学生と交流を行いました。NP 生からのプレゼンテーションやシンガポールクイズに続き、私たちも北海道や北海道大学を紹介するプレゼンテーションを行いました。学生たちは私たちの発表に興味津々に耳を傾けていて、中でも北海道に関して特に関心を寄せているような印象でした。後から聞いたのですが、シンガポールでは「北海道」に対するブランドイメージがあり、憧れを抱く人が多いのだそうです。プレゼンの後はいくつかのゲームをして打ち解け、交流を深めました。

（学生交流を行った教室にて、Ngee Ann Polytechnic 生とともに）

グループ毎にアウティング

交流を深めた後は、北大生 1～2 名と NP 生 4～5 名のグループをつくってシンガポールの街を散策しました。私のグループは、NP 生女子 4 名と私 1 名という構成でした。シンガポール独特の食べ物を共に味わった後に Little India を訪れ、インド系の方々しか目につかず、またインド風の街並みが続く光景を目の当たりにして、シンガポール国家の多文化性を再認識しました。

その後、シンガポールで最も人気のある場所の一つであるマリーナ・ベイという地区を訪れ、水のショーやガーデンズ・バイ・ザ・ベイのショーを鑑賞しました。夜景が綺麗なのはもちろん、

©2017 国立大学法人北海道大学

後者のショーでは英語・中国語・日本語・韓国語・マレー語など様々な言語の曲が使用されていて、最後まで多文化性溢れるシンガポールらしさを感じさせる要素が満載でした。

（アウティング時にて、NP 生とともに）

道中では NP 生と様々な会話を交わしました。彼女たちは日本語を学校で勉強しているだけあって、日本にとても興味を持っているようでした。アニメ・漫画・ドラマを字幕なしで楽しめるようになりたいというのが日本語を学ぶ主な理由のようでしたが、日本の伝統的な文化や国そのものにも大変興味があるようでした。来日経験もあり、数週間後に日本に行くという方もいました。

彼女たちと話していて特に驚いたことは、やはり「国」のとらえ方の違いです。ある NP 生はテレビ局で働くのが夢だそうです。しかし、シンガポールには就職先のポストも少なく、おそらく海外に行かなくてはいけないということでした。また彼女たちは全員中華系でした。家族と会話するときは英語と中国語が織り交ぜられていて、中国にも何度か行ったことがあるものの中国に住んでいたのはかなり前の世代の祖先であり、ルーツが中国であるというだけで現在はその国自体と何ら関係がないということでした。そして、週末には物価の低いマレーシアにパスポートを持って買い物に行くそうです。私は、彼女たちの「国」の捉え方を知り驚愕しました。日本が国際的に見ても極めて特殊であることは否めませんが、自分の持っていた価値観を根底から覆されるような心情でした。日本で暮らしていれば、生涯日本から出ずに何不自由なく豊かな生活を送ることも可能であり、実際そのような人も多いと思います。高度経済成長期を経て、内需国として発展を遂げた日本では海外へ行く必要性がありません。

しかし、まず一つ目にシンガポールはそもそもシンガポール固有の民族を持ちません。国民の70%以上が中華系であり、それにタミール系、インド系が続く形です* 。よって単一の民族が多くを占めている日本とは、もはやスタンダードの土台が違います。同じ国民であっても異なる文化的背景を持っている、一定の共通した価値観・常識を必ずしも持っているわけではないということです。二つ目に、シンガポールは国としての歴史が十分あるわけでもなく、国土が狭く、資源も乏しいため、自国だけですべてをまかなうのは不可能です。そこで必然的に他国との関係は重要視されます。それは「個」のレベルにおいてもそうです。シンガポール国内だけでは、500 万を超す国民すべての需要に合わせた供給を施すことが間に合わないからです。したがって国単位、または個人単位で海外から必要に応じて商品を輸入し、消費するということになります。

自己を知るために必要なのは他人を知ること、今回の経験はまさにこの言葉を体現したものでした。都市国家であり経済大国であるシンガポールという国を知ることで日本をより深く知ることができたと思います。もちろん、グローバルで多様な価値観を理解するという点においても十分役立ったと感じます。（文責：福井）

(*出典:外務省「国・地域」http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/singapore/data.html#01 2017 年 4 月 15 日閲覧)

©2017 国立大学法人北海道大学

National University of Singapore （略称：NUS）

研修最終日に訪問したのが、北海道大学の協定校であるシンガポール国立大学。大学ランキングアジア 1 位* として知られるこの大学の学生と交流を行いました。

（* 2016 年、イギリスの教育専門誌「タイムズ・ハイヤー・エデュケーション（ＴＨＥ）」による）

学生交流

NUS の学生とともに写真を撮影した後、食堂に案内していただき、共に食事を楽しみました。食堂はフードコート形式で、日本、インドネシア、シンガポールなど様々な国の料理がありました。その豊かさに驚くと共に様々な人種が共存する多民族国家としてのシンガポールや、アジアにおける貿易拠点としてのシンガポールを感じました。食堂内にはアジア以外の国から来たと思しき人も散見され、食堂に入るだけで日本との国としてのあり方の違いをまざまざと感じました。

食事中は NUS の学生と多く会話を交わしました。彼らは非常に日本語が堪能で、積極的に日本語で私たちに話しかけてきました。彼らと交流する中で一番驚いたのが彼らの勉強時間です。多い人は 1 日 10 時間以上勉強しており、少ない人でも 3 時間程度は勉強しているそうです。彼らの勉強に対する意欲は日本の一般的な学生とは比べ物にならないと思いました。

食事の後は各自でお土産を買ったり学生にキャンパスを案内してもらったりしました。今回の FSP アジアではメンバーにピアノの心得がある学生がおり、また先方にもピアノを弾ける人がいたので、ピアノで共演するといった出来事がありました。こういった非言語的コミュニケーションも他者と共感し合う強力なツールであると感じました。その時間にテラスも案内していただきましたが、そこでは多くの学生が勉強しており、遊んだり居眠りしたりしている学生は皆無でした。

（文責：葉柳）

（テラスで勉強する NUS の学生）

（NUS University Town の入口にて NUS 生とともに）

©2017 国立大学法人北海道大学

Yale-NUS College

NUS と米国の Yale University がタッグを組んで 2013 年に開校した、アジア初のリベラルアーツ・カレッジ。キャンパスは NUS に隣接しており、新しい施設を見学させていただきました。

キャンパスツアー

日本人学生はグループに分かれ、各グループに 1 人 Yale-NUS College の学生がついて、キャンパス内を案内して頂きました。慣れない日本語で、メモを見ながら私たちにもわかるように説明してくださり、このような相手を尊重する姿勢は私たちも見習うべきだと感じました。

（左写真：キャンパスツアーの様子）

ツアーで回った場所の中にはアトリエやフィットネスルームなどがあり、設備は大変充実していました。ブラックボックスなど、ドラマの中でしか見たことがないような施設も揃っていました。他に普通の教室も案内して頂きましたが、その際、机が 1 つずつ並んでいるのではなく大きなテーブルが 4 つほどあり、班活動をするためのつくりになっていることに気付きました。学生に話を聞くと、授業中先生は少しヒントを出すのみで、基本的には学生たちが自ら話し合いをして授業を進めていく形式だそうです。このようなところに、人材育成に力を入れているということが表れていると感じました。

（見学した教室の 1 つ）

（整備されたキャンパス。奥のビルは学生寮）

（学生食堂）

©2017 国立大学法人北海道大学

学生交流

（プレゼンテーションの様子）

両校による出し物、プレゼンテーションが行われました。まず Yale-NUS College 側の企画で、ダンス、歌の披露が行われました。プレゼンテーションは、シンガポールや Yale-NUS College について、が主な内容で、特に Yale-NUS College は設立からまだ歴史が浅く、今年第 1 期生が卒業する予定である、とのことでした。

北海道大学側からは、プレゼンテーションと、アイスブレイクや人間知恵の輪などのレクリエーションを行いました。プレゼンテーションでは北海道大学の魅力について伝え、キャンパス内で見られる動物についての部分、とりわけキツネが好評であったように感じました。アイスブレイクではたくさんの人の名前を覚える場面がありましたが、多くの Yale-NUS College・NUS の学生は、日本人の名前をすぐに覚えていました。多民族国家で、様々な名前の人に日々出会っていることから、色々な名前を覚えることに慣れているように見受けられました。

全ての交流行事が終了した後、Yale-NUS College や NUS の学生が MRT(地下鉄)の駅まで送ってくれたり、その後の目的地まで車で運転することを申し出てくれたりして、出会った人々を本当に大切にしてくれていることが伝わってきました。　（文責：近江）

（学生交流後、Yale-NUS College 生・NUS 生とともに）

©2017 国立大学法人北海道大学

研修報告 3：企業・組織訪問

独立行政法人 国際協力機構（JICA）プロジェクト ベトナム日本人材協力センター

JICA 専門家 若林勇飛 様によるご講話

第 19 回 FSP アジアが企業・組織訪問で最初に訪問させていただいたのは、ホーチミン市ビンタイン区にあるベトナム日本人材協力センター（VJCC: Vietnam – Japan Human Resources Cooperation Center）。JICA 専門家の若林様からご講話いただきました。

まず、はじめに JICA について、また VJCC の概要を説明していただきました。

世界の人口の約 8 割が開発途上国に住むという現実があります。文字が読めない・飲み水がない・住居がないなど、課題はたくさんあり、援助を必要としています。現在先進国となった日本も、主に世界銀行などから過去に支援を受けていました。援助の返済が終わったのは、1990 年 7 月で、そのときから日本は被援助国ではなくなりました。

そして、日本は技術協力プロジェクトをベトナムで実施することになりました。ただ物資だけで援助することを目的とせず、自立してもらうことを目的としています。VJCC では、ビジネスコース・日本語コース・相互理解促進事業を展開し、人材育成を行っています。これらの支援は、貧しい方向けには行われておりません。しかし、それは、1 人が成功すれば多くの人の支援をすることができるためです。例えば、ビジネスコースを卒業した経営者が 1 人成功すれば、雇用創出など、何十万人の支援ができることになります。

最後に、ベトナムという国についてご説明下さいました。ベトナムの歴史、独特な文化について、また、日本との関係についてお話していただきました。長期にわたりベトナムにお住まいで仕事をされている若林様だからこそご存知でいらっしゃるベトナムについて知ることができて、とても良かったです。

全体を通して、なぜ日本は国際協力をしているのか、あるいは、しなければならないのか、を学ぶことができました。また、ベトナムと日本の強力な友好関係がどのように築かれてきたのかを知ることができ、とても勉強になりました。　（文責：神）

（若林様と VJCC にて）

©2017 国立大学法人北海道大学

Seed to Table ～ひと・しぜん・くらしつながる～

代表 伊能まゆ 様とともにメコンデルタの農村訪問

研修 4 日目。ベトナムで人々と共に食・農・地域づくりに取り組み、成果を残している NPO 法人 Seed to Table 代表の伊能様とともに、ホーチミン中心部からバスで南に 3 時間ほどのメコンデルタ地帯、ベンチェ省ビンダイ郡の農村を訪れました。実際に村を目で見て農家の方から話を直接聞くというのは普段の生活では絶対できない経験であり、貴重な一日となりました。

はじめにロックトアン村を訪れ、有機農業に取り組みベトナム南部で初めて有機 PGS 認証を得た農家さんグループを訪問させていただきました。ここでは畑を見学しながら、周りの村民とどのように協力していくか、カギとなる多様性をいかに維持していくかなどご説明いただきました。農家の方には直接数多くのことを尋ねることができ、農村での暮らしぶりについて意外であった点・驚いた点含め多くのことを知ることができました。伊能様のお話で印象的だったのは、大人数の事務所を作って支援活動を行うのもひとつの手ではあるが地元の村民・行政に深い理解を促し主体となって活動してもらうということが持続可能性の面では重要だという話です。「NPO の組織を持続させることではなく現地の人々を持続させることが重要なのであって、自分たちの活動の必要がなくなることが目標だ」という言葉が強く印象に残っています。

（伊能様・農家の方を囲んで質問タイム）

（支援によるウシとココナッツ畑の様子）

次にヴァンクオイドン村へと移動し、「持続的農業の実践による貧困世帯の生活改善事業」により貧困からの脱却に成功した家族を訪問・交流させていただきました。ここではアヒル銀行・ウシ銀行の取り組みについてなどご説明いただき、私たちからも多くの質問をさせていただきました。世帯の方とのやり取りで印象的だったのが、学生からの「今後さらに支援を貰えるとしたら何がよいか」という質問に対し「モノの支援を貰っても延々に続いてしまうだけだ」との回答があったこと。現地の人が活動に対して深く理解をしているのだと分かり驚くとともに、こうした現地の人の理解が重要だということを改めて感じる機会となりました。

©2017 国立大学法人北海道大学

（村の方々から教えていただきました）

最後にヴァンクオイドン村では村づくり委員会の皆さんとともに有機野菜を活用したベトナム料理「Bánh xèo(バインセオ)」作りの体験をさせていただきました。英語は殆ど通じない状況でしたが手取り足取り教えていただき、村の人々の温かさを感じるとともに、たとえ英語が通じなくても伝えようとする意志さえあれば伝わるものがあるのだということを強く実感しました。

この最後のひとときで強く印象に残っているのが、手渡した我々の参加者リスト（顔写真と自己紹介が書かれたもの）の中の写真と私たちの顔を照らし合わせ、一致する度にとても楽しそうに賑やかな大笑いを見せる村の人々の様子。本当に何気ないことなのに、それに対して心の底から楽しそうな顔を見せてくれる。この姿は本当に「幸せそう」に見えました。

このことは皆の心にも印象に残っているようで、帰りのバスでは「幸せとは何なのだろう。貧しい農村での暮らしの中でも、村の人々はあんなに幸せそうなひとときを過ごしている。もしこの村が開発の波に呑まれたら、あの人々はどうなってしまうのだろうか。」など議論が盛り上がることに。また、日本でもこういった村の風景はまだ残っている、との声を上げる人もおり、自分たちは日本の農村のこれまでの歩みと課題、そしてこれからについて実はあまり知らないのではないか、ということに気づくとともにベトナムでの課題を考えることは日本のこれからを考えるうえでも重要なのではないか、ということを感じ新たな知的好奇心の旅への一歩となりました。

（文責：山木）

（村の方々、伊能様とともに）

©2017 国立大学法人北海道大学

MSD Vietnam Representative Office

Managing Director, Koen C. KRUIJTBOSCH 様はじめ社員の皆様からのご講話

研修 5 日目。世界展開している企業である MSD 様のベトナムのオフィスに訪問させていただきました。MSD は医薬品・医療機器を取り扱う企業で、アフリカやラテンアメリカで感染症への取り組みを行うなど世界の課題解決に貢献していることでも知られます。

今回は、会社の理念・根幹となる考え方などを説明していただき、その後は社員の方々お一人お一人がキャリアを築く上で大切にしてきたこと、学んだことを教えていただきました。その中でも、特に印象に残ったのが中心講師を務めてくださった Koen 様のリーダー論でした。北大生からの、リーダーとして必要なことは？という質問に対して、「リーダーとして大切なのは『自分らしく』あること」というお答えを頂きました。「社会には優秀なリーダーが山程いる。しかし、100 人のリーダーがいれば 100 通りのリーダー像があり、あなたが誰かの真似をする必要はない。重要なのは、あなたに一番合った方法でチームを導くことだ。」と Koen 様はおっしゃっていました。実際、Koen 様はさまざまな国でリーダーとして活躍されており、日本での勤務経験も長期に及んだそうです。その中で、リーダーとして、ある意味独断的に決定することを求められる場面もあったそうです。しかし、Koen 様はそういった方法を好まず、あくまでメンバーの意見を聞いて民主主義的に決断することを重要とし、またその自分のやり方を決して変えなかったそうです。やはりリーダーといえば、必要な時にはその優れた観察力や判断力によって大きな決断を下し、チームをより良い方向へと導くものだと思っていましたが、必ずしもそのような手順は必要ないのだということを学びました。メンバーそれぞれの持つ力を最大限引き出すことが、たとえそれがリーダーであっても、チームにとって最も有益なのだと感じました。

（文責：福井）

（MSD Vietnam Representative Office の皆様とともに）

©2017 国立大学法人北海道大学

日本航空株式会社（JAL）シンガポール支店

シンガポール支店長 山下康次郎 様のご講話

シンガポール初日。チャンギ空港到着後、空港内の日本航空株式会社様オフィスを訪問させていただきました。支店長の山下様からはキャリアについてご自身の豊富な体験談をもとに力強いメッセージとなるご講話を頂きました。

今回のご講話でのポイントは､｢自分の意志で生き､自分の生き方を考える｣ということでした。日本人は就職活動の際､「大企業に勤める、有名な○○社に入る」などの目標を立て、その達成をゴールと考えがちですが、人生において重要なのは「どこで働くか」ではなく「どう働くか」であると山下様はお話しされていました。もしその人が人生を通してやりたいことがあるのなら、それはどの会社に入っても実現可能であり、ご自身も「人の役に立つ」という大きな軸をもってこれまでご活躍されてきたということです。JAL 入社以前は大手銀行でディーラーとして成功されていた山下様ですが、湾岸戦争時、多くの人々が亡くなっている一方で巨額の利益を上げるご自身の職業、延いては生き方について疑問を持ち、やはり人のためになることをして生きていきたいという強い思いから現在のキャリアに至るということでした。

また、その他にも女性の社会進出、国際社会における日本、物流の覇権争いやシンガポールの多様性についてなど様々なお話を伺うことができましたが、私が個人的に印象に残ったのが､「すべてを”郷に入っては郷に従え”と考えなくてよい」というお話です。海外では、いつも 5 分前行動する日本人を真面目すぎるとよく馬鹿にするそうですが、もし大事な仕事を任せるのなら普段から時間に厳しい日本人はやはり選ばれやすいのだから、海外流に合わせて自分も時間にルーズになるのではなく、グローバル化する世の中だからこそ良い部分は変わらず持ち続けるべきだとおっしゃっていました。（文責：福井）

（山下様とともに空港内にて）

©2017 国立大学法人北海道大学

丸紅アセアン会社

安延庸志 様、山口敬畝 様のご講話

シンガポール 2 日目。高層ビル群が象徴的な Raffles Place 駅周辺に位置する丸紅アセアン会社様オフィスを訪問させていただき、北海道大学出身の安延様、そして人事を担当されている山口様からご講話いただきました。

「総合商社」。よく耳にするものの、どんなものなのかよく分かっていない。そのような人のために、まずは総合商社とは何かについてご説明いただきました。全産業にまたがる事業領域を持っており物流や情報など様々な機能を持つこと、企業相手のビジネス（B to B）だけでなく私たち消費者へのビジネス（B to C）も担っており、このように「繋ぐこと」が総合商社の機能であることなど、イメージが膨らみました。

総合商社の大きな特徴として挙げられる海外赴任という点から、海外で働くということについてもお話いただきました。今の時代ではベトナムの山間部やラオスなどどのようなところでもインターネットが繋がり、単身赴任でも毎日家族（子供含む）と Skype で話すことができるため以前と比べると気軽になったという話を聞くとともに、大変多くの社員の方が現在アジア各地に赴任しているということを知り、意外にも身近なところに海外はあるのかもしれないと感じ海外に対するハードルが少し下がったような気分を感じました。また、英語以外の言語を大学時代に専攻していたことがきっかけでその言語圏の国に赴任することができたという話を聞き大学時代の経験と将来の活躍との結びつきを感じました。

このほか、独自の志を持っているが個人では経験や人脈が不十分な場合、いったん会社で働くということをうまく活用し経験を積むのもひとつの手であるということ、会社内で年の離れた先輩と気軽に議論・雑談することで貴重なものが得られるということ、仕事以外にも何か没頭できる趣味等を持つことが重要だということなど、将来のキャリアや過ごし方について数多くお話をいただき、私たちも人それぞれ将来への展望に少しばかりか新たな光を取り入れることができました。

（文責：山木）

（安延様、山口様とともに）

©2017 国立大学法人北海道大学

Temasek Life Sciences Laboratory, Mechanobiology Institute

主任研究員 茂木文夫 様、主任研究員 遠山裕典 様のご講話

研修 10 日目。シンガポール国立大学（NUS）構内に設置されている Temasek Life Sciences Laboratory, Mechanobiology Institute 様を訪問し、茂木様・遠山様からご講話をいただきました。

お二人はともに、mechanics と biology を合わせた Mechanobiology という分野を専門に研究されていて、この Mechanobiology とは物理的な環境・刺激が、生物反応・機能・現象を制御するメカニズムの解明を目指す分野です。お話しいただいた中から一つ、細胞分化のメカニズムを紹介します。生物の細胞の中には MSC（Mesenchymal Stem Cells）と呼ばれる細胞があり、その細胞は様々な種類の力を受けてそれぞれ異なる組織に分化する能力を持つ。具体的には soft な力を受けた場合 nerve(神経)、stiff な力を受けた場合 bone(骨)というように分化する。Mechanobiology Institute ではこのようなメカニズムに焦点を当て研究されているということでありました。

研究所の特徴としてオープンラボであるということを伺いました。オープンラボとは各ラボが広い一室にいくつか入っており、さらにその部屋が他の部屋ともつながっているというもので、利点としては他のラボとのシナジー効果が大きくなるということが挙げられます。日本の大学に多く存在する、各研究室が一室に入っているという形式では交流が起こりにくいのに対し、オープンラボではコラボレーションが生まれたり、新たな発見が生まれたりしやすい環境になっているとのことでした。

©2017 国立大学法人北海道大学

さらに、日本の学生と海外の学生の違いについても伺いました。日本の学生は自らの専門分野には強いがそれを応用化する段階で他の分野が入ってくると海外の学生に劣る傾向にある一方、海外の学生は一つの分野だけ見ると日本の学生に劣るが幅広い分野の知識を持っているため応用や他分野とのコラボレーションでは力を発揮する傾向にあるといいます。このような傾向からなのか、入学時点では日本の学生の方が力はあるものの最終的には海外の学生の方が全体的な下地があったため、力を伸ばし日本の学生よりも研究に優れている傾向があるとのことです。これは大学の教育制度の違いもあるとは思うが今後意識しておくべき点であろうと感じ、一つの分野や自分の興味のある分野ばかりやっているのではなく他の分野にも目を向けることが重要であると認識することができました。

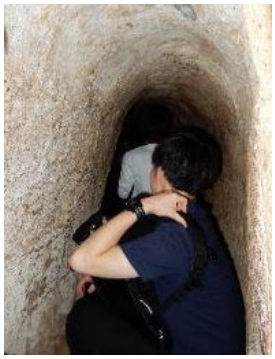
また、私たちのためにご自身の海外での留学・研究経験などについてもお話しをしてくださいました。特に印象に残ったのが海外で留学・研究することのメリットについてです。海外での留学・研究は日本でのものよりも、人・ものとかかわる機会が圧倒的に多く、それにより自らが刺激され学ぶこと・気づくことが多くなるということでした。長期的・本格的な留学や研究経験がない我々にとって将来そのまま北海道大学の大学院に進むのか、海外の大学院に進むのか、また学部生である間に留学を実際に考えることのできる非常に貴重なアドバイスとなりました。お話を伺った我々一同、自らの近い将来の進路について、また海外での留学・研究について具体的に考えるきっかけをつかむことができました。（文責：池谷）

©2017 国立大学法人北海道大学

訪問国調査活動

ここまではプログラムの主な研修内容について紹介してきましたが、次は研修時間外の活動、「訪問国調査活動」について紹介します。p.6 にも記載した通り、この活動では各自設定したトピックをもとに様々な視点から 2 国について調査を行いました。市場や観光地、街の様子を見ただけでもその土地の特徴や日本との違いなど多くのものを実際に感じられ、博物館や自然保護区など各々が興味ある分野を調査して訪問国について具体的に知ることもできました。協定校の現地学生とともに行動した学生は、個人で歩くのとは違った視点で街を見ることができ、会話を通して日本を外から見るという体験もできました。日ごとに行先を合わせて行動メンバーを編成したので多種多様な行先となりましたが、ここではその中から選んだものをいくつか紹介します。

ベトナム：Cu Chi Tunnel　(Half-day Tour)



研修 2 日目午後の時間を利用して、ホーチミン中心部から北西に 2 時間弱、カンボジアとの国境にも近いところを訪れ、クチトンネルというベトナム戦争の際に人々の行動の拠点として使われた巨大な網状の地下トンネルを見学しました。現在は、トンネル内での当時の生活の様子や実際の罠・武器などを展示する戦争史跡公園となっており、私たちが参加したツアーの中にも欧米系をはじめ様々な国から見学者が集まっていました。

（右写真：トンネル内部の様子）

（現地ガイドによる説明）

公園内ではベトナム人のガイドさんとともにトンネル内部や秘密の入口、罠などを見学し当時の話を伺いました。巨大な敵を相手にしてただ怯えるのではなく、根気強く工夫を凝らして必死に生きようと戦うベトナムの人々の団結力や、村に対する強い想いがひしひしと伝わってくるものばかりで心に強く印象に残っています。ベトナム戦争について学ぶとなると、米軍などの側からの視点で見てしまいがちですが、こうしたベトナムの村の人々の視点から戦争について見つめることも重要であり、日本にいてはなかなかできない貴重な経験を得ることができました。

（鄙びた道を往く）

また、このツアーではクチトンネルに訪れるだけでなく、その道中で多くの発見を得ることができました。運河沿いの道を抜け、支援により拡幅されたAH1（アジアハイウェイ）の立派な道、そして写真のような鄙びた道へと変化していく車窓からはホーチミン中心部の喧騒とはまた違ったベトナムらしさを感じ、通りを歩く人や家の軒先で家族と時間を過ごす人の様子を車内から垣間見ることで日本とは大きく異なる点が多いベトナムの人々の生活ぶりを生き生きと感じとりました。　（文責：山木）

©2017 国立大学法人北海道大学

シンガポール：MRT・バスを乗り継いで北西部の Sungei 自然保護区へ

研修 9 日目の訪問国調査活動の時間に、シンガポール北西部、マレーシアとの対岸に位置する Sungei Buloh Wetland Reserve という自然保護区を訪れました。

ホテルがあるのはシンガポール南側、City Hall 駅のあたり。ここからまずは MRT に乗り込みます。MRT（Mass Rapid Transit）とは、市街地は地下、郊外は高架を走る都市鉄道で、シンガポール国内では路線が張り巡っています。車内での飲食が禁止となっているのが特徴で、私たちもうっかり水を飲みそうになる場面が多々ありました。罰金だらけで窮屈な場面が多い国ではありますが、多民族が入り混じりながらもトップクラスの治安を保つ秘訣はこういうところにもあるのかもしれないと感じました。

さて私たちは Jurong East で乗り換えて Kranji 駅へ。途中の車窓からはシンガポールの 7～8 割が住むといわれる HDB（公営住宅団地）の建物群や工業地帯などを望むことができました。Kranji からは路線バスに乗車。目的の系統を探すのに少々戸惑いましたが無事に見つけ、Sungei まで辿り着くことができました。この辺りはインド系の人が多くいるようで、途中多くの人を目にしました。地域によって代表的な民族が異なるという感覚は新鮮でした。

Sungei の公園内では、熱帯の植物やマングローブを間近で観察することができました。親子連れも多く訪れており、国民の憩いの場となっているようでした。対岸にはマレーシアが見えており、マングローブの対岸に位置するビル群が印象的でした。シンガポールは一面のコンクリートジャングルで、マレーシアは比較的長閑な風景が広がっているというイメージを私たち学生は抱きがちですが、実際それはほんの一面であり、ひとつの国にも多様な顔が存在する、そう感じさせる風景でした。（文責：山木）

写真：上から順に
1. MRT 車両。日本メーカー製も存在
2. 車内に表示されていた禁止行為の例
3. Kranji 駅のバス停。乗ったのは 925 番
4. マングローブを間近に観察できた
5. 対岸に見えるマレーシアのビル群

©2017 国立大学法人北海道大学

研修報告 5：全体を通して・事後授業

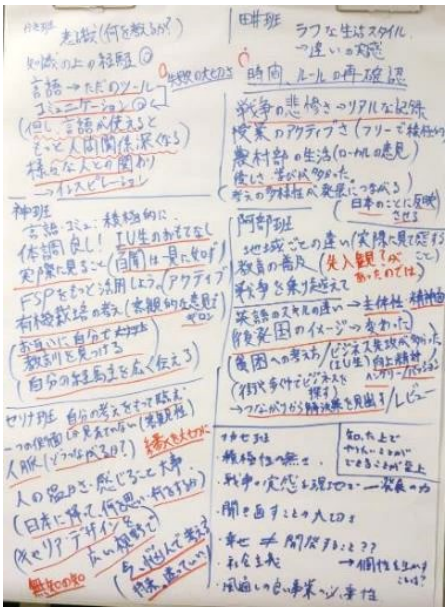
日本とは異なる土地の文化に触れ、現地の様々な方からお話を伺い、仲間との会話からも刺激を受け、人それぞれ多くの学び・発見があった海外での研修も 2 月 28 日（火）、無事に全員で終え帰国することができました。

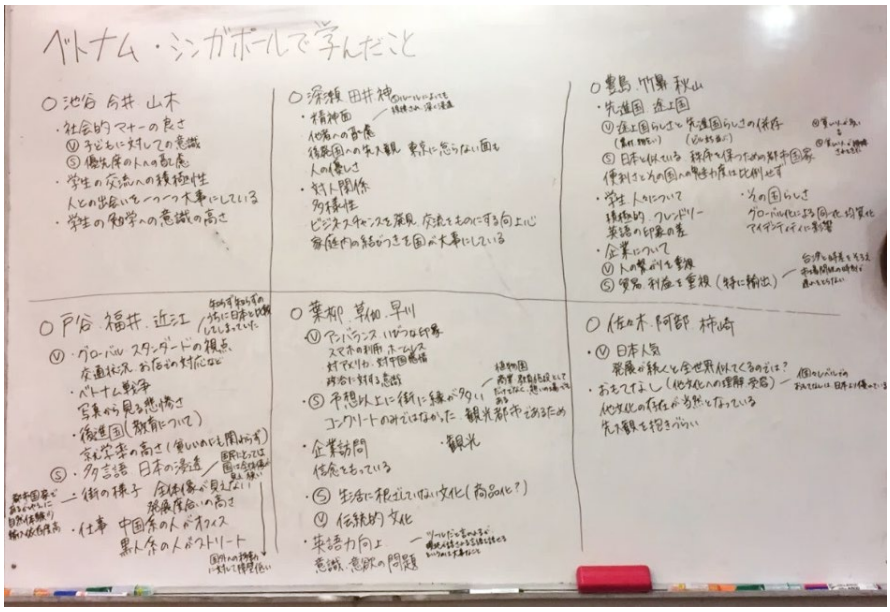
帰国後約 1 か月間の春季休業期間中にも本学の留学生と交流したり、外から見ることで見え方が変わった日本を更に深く知るべく国内で「訪問国調査活動」のような調査活動を行ったりと、この研修を受けて各々行動を起こした学生も多く見られました。

（事後授業では同時開催の北米・中国プログラムからの体験談共有も行いました）

4 月 12 日（水）には帰国後初めてメンバーが顔を揃える事後授業が行われ、今後のセカンド・ステップへ向けた話を受けました。短期留学スペシャルプログラムなど学内のプログラムや交換留学に留まらず、今後の大学生活において踏むことができるセカンド・ステップは数多くあることを再認識し、学生それぞれ自分の今や将来について見つめ直していました。

第 19 回 FSP アジアのプログラムは 4 月 26 日（水）の帰国報告会をもって終わりますが、この研修で得ることのできた学び、そして人との繋がりは、今後も続いていくものです。人生を大きく変える、というと誇張表現になるかもしれませんが、得られたものをそのままにすることなく今後の人生に活かしていくことこそが重要なのであって、そのためにこれから我々一同、自ら行動を起こしていきたいです。（文責：山木）





（ベトナム、シンガポールでの振り返りミーティングの際に共有した「学び」）

©2017 国立大学法人北海道大学

現地でのエピソード（体験談・失敗談）

道路横断

（溢れる道路の様子）

ベトナムといえば？ と聞かれて多くの人が答えるものの１つが「バイク」。そう、道路はバイク、バイク…本当にバイクだらけなのです。「信号のない所を無理矢理渡る」そんな噂に我々は震え上がっていましたが、それもすぐに消えることに。現地コーディネーターの後藤田明子さんのアドバイスのもと、試しに渡ってみると、バイクのほうが止まったりスピードを緩めたりしてくれるのです。片手でバイクの動きを制しながら自分の足でゆっくりと渡っていくのは、慣れてくると爽快にも感じてきました。

それにしても、驚くべきは現地の人の運転技術。研修中、写真のような光景は多々見ましたが 1 度も事故を見ることはありませんでした。建設が進む都市鉄道よりもバイクのほうが便利だと言っている人もおり、まさにバイクと共に社会が成り立っているのだなと感じました。

（ベンタイン市場。左右に伸びる狭い通路には店が詰まっている）

値段交渉

ベトナムでは大型店やコンビニ、新しい店のほかは定価を設定していないところが多く、値段交渉が必要でした。英語に自信がなく不安な面もありましたがなんとか伝えられ、買い物を進めていくことができました。

ベトナムでもシンガポールでも物価に対して警戒しすぎ、最終日にお金があまってお土産を爆買いするという失敗をしてしまいました。

人々のおもてなし

ベトナムでもシンガポールでも日本人だということを伝えると、「こんにちは！」と日本語で挨拶してくれる人が多くとてもうれしい気持ちになりました。また、ベトナムでは行く先々で訪問先の方々が水のペットボトルを提供してくださり、リュックやホテルの部屋がペットボトルだらけになったというのも良い思い出です。

訪問校の学生は積極的に話をしてくれるなど特に私たちに親切に接してくれ、訪問国調査活動のときも授業終わりに合流して街を案内したり料理を紹介したりしてくれました。「おもてなし」をアピールする国、日本。そこで暮らす私たちは、北海道大学に来た留学生に対しこんな親切な接し方をできるのか。改めて、今後の姿勢について考えさせられました。

©2017 国立大学法人北海道大学

参加者の声・メッセージ

このコーナーでは研修後、参加者 18 名にとったアンケートをもとに具体的な「声」を紹介します。最後には次回参加者へのメッセージも添えていますのでぜひご覧ください。

Q1.　今回の研修に参加してよかったと思いますか？

そう思う	まあそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
77.8%	22.2%	0.0%	0.0%	0.0%

Q2.　参加理由は何ですか？ 特にアジアを選んだ理由は？

「東南アジアの現状を自分の目で見たい」「途上国と先進国、日本との違いを見たい」「途上国、しかも農村に行ってみたい」など途上国や東南アジアに興味を持って参加したと回答する人が最も多く（12 人)、他にも「単なる語学研修ではなく企業や大学を訪問し色々な方と交流できるから」「将来の選択肢を考えてみたいから」「自分ひとりではなかなか行けないから」など FSP ならではの回答や「新しいことをやってみたい」などの回答がありました。

Q3.　参加する前に不安だったことは何ですか？ また参加した結果どうでしたか？

「健康面・蚊（7 人)」「スリ・治安（3 人)」など、安全面での不安を抱える人が多かったものの、「生水は飲まない」「車道側にかばんを提げない」など事前授業で対策について議論した成果もあって被害に遭う学生はおらず、「思っていたよりも安全だった」という声を多く耳にしました。

次いで多かったのが「英語が不安、コミュニケーションをとれるか不安（5 人)」という声。しかし「自分がコミュニケーションをとろうという意欲を持てばできる」「なんとかなった」など実際やっていけることに気づき現地学生と会話できたことに自信を持つ学生も多かったようです。

Q4.　FSP で最も成長した・得られたと思うことは何ですか？

「メンバーを含め様々な人と交流し、多様な視点を感じられたこと（6 人)」「今後への展望・キャリアに対する考え方（5 人)」「自分の現状の認識（2 人)」「海外や留学への意識・興味（2 人)」などのほか、「外から日本を見る視点」など、皆それぞれに学ぶことがあったようです。

Q5.　もっとこうしておけばよかったと後悔したことは？（研修前・研修中）

「歴史など訪問国についてもっと調べておくべきだった（5 人)」「現地学生との共通の話題・自分の特技を示せるものを用意（2 人)」「英語力（2 人)」などのほか、「現地の人に尋ねてみたい疑問点の整理」「花見・アニメのような文化だけでなく日本の日常生活スタイルも説明できるようにする」などが挙げられていました。その他、どのくらいの金額を両替するのか計画的に行えばよかったという声もありました。

©2017 国立大学法人北海道大学

Q6.　今後参加する人へ一言！

私たちからのメッセージを集めました。紙面の都合で抜粋となっていますが、ぜひご参考に！

実際に現地に行ってみないとわからないものは確実にあります。先入観というものは当てにならないのです！

毎日、どの瞬間にも学びがあるプログラムです。学ぼうという意欲があれば、より多くのものを吸収することができると思います。

語学研修ではないので「英語ができないから～」という理由で躊躇う必要はありません。重要なのは英語力ではなく伝えようとする意志ですよ。

海外で色んな人種・世代の人と交流し、沢山の考えや価値観に触れることができます。楽しみつつ、多くのことを経験して、自分なりの FSP にしてほしいと思います。

絶対人生において大切なことが学べると思うので迷っていたら是非参加してみてください。

仲間と共に行くからこそ得られるものというのは大きいです！ 個人で行くのとは得られるものが全然違いますよ！

人との繋がりを大切に！

やる気さえあればなんとかなります。ぜひ挑戦してください！

海外が初めての人は不安に思うかもしれないけれど、意外となんともなかったりします。FSP に参加して後悔している人は見たことが無いし、私自身も参加して良かったと思っています。ぜひ参加を検討してみて下さい。

色んな人と話して学んで、色々なものを見て、沢山楽しんできてください！

ストリートビューやネットの動画で世界旅行した気分になるのは良くない！ 実際に行かなければ分からないものが多々ある！この研修で強く感じました。

Q&A ～よくある質問～

Q.　ベトナム語は勉強しましたか？

今回は本格的に挑戦した人はいませんでしたが、”Tôi là ○○~”（私は○○です）や基本的な挨拶は覚えておくととても役に立ちました。少しでも口に出すと、現地の人はとても喜んでくれました。

Q.　服装はどのようなものでしたか？

ベトナム・シンガポールとも日本の真夏のような気温ですので半袖は必要でした。企業訪問の際はフォーマルに近い装い（気候を考慮し、上着着用の義務付けはなし）です。また初日は真冬の北海道出発ということなので皆それぞれ工夫を凝らしていました。

©2017 国立大学法人北海道大学

編集後記

私たちが執筆した報告書にお目通し下さいましてありがとうございました。この報告書は記録広報班の学生 3 名が中枢となって編集しており、さらに一部プレゼンテーション班の 4 名にもご協力をいただいています。最後になりましたが、編集に携わった 7 名より一言ずつ言葉を述べさせていただきます。

・ 研修後、この報告書の編集を進めていく中でも他の学生の原稿を読んでこんな視点もあったのかと感動することが多く、本当に人との関わりを通して学ぶことが沢山ある研修だったなと改めて感じています。沢山の想いが詰まったこの報告書をきっかけに、一人でも多くの方が FSP アジアへの関心を深めていただければ何よりです。（山木 聡一郎）

・ 報告書作成にあたって、インターネットなどでは手に入れられない、FSP を実際に体験してきた私たちだからこそ伝えられることは何かを考えました。参加者アンケートを実施して、FSP アジアに参加した動機や成長したことを調べました。この報告書を読んで、FSP アジアではどのような体験ができるのか、また、FSP アジアの魅力が皆様に伝われば幸いです。最後まで報告書をお読みいただきありがとうございます。（神 明里）

・ 初めは中高生のようだなと感じたグループ活動や事前・事後学習でしたが、大学生になった今するからこそ、意見の共有や共に何かを作り上げることがより学びを深く、有意義にするのだとわかりました。記録広報班として、この報告書製作に携われて良かったです。ご精読ありがとうございました。（福井 真依）

・ 最後まで報告書をお読みくださりありがとうございます。私自身も記録広報班・プレゼン班の皆さんの書いた報告を楽しく読ませていただきました。私たちの FSP アジアでの経験は本当にかけがえのないものです。この報告書を読んでくださった 1,2 年生が FSP に参加し、さらに、報告書や帰国報告会などを通じて自身の経験を私たちや、未来の FSP 参加者に共有してくださることを心より願っています。（今井 ゆき菜）

・ 私はプレゼンテーション班でしたが、今回全体報告書の作成に協力することになり、その中の一部を書かせていただきました。こうして自分の言葉で FSP での体験をまとめ直すことで、その体験をより確かなものにできました。（葉柳 響一郎）

・ 現地で漠然と感じた、モヤっとした何かを具体的に書き起こすことは難しかったですが、それによって、自分が何を得たのかをよりはっきりさせることが出来たように思います。この報告書が、FSP 参加を決める手助けになれれば幸いです。最後まで読んで下さいましてありがとうございました。（近江 芹菜）

©2017 国立大学法人北海道大学

・ 報告書を書くということを通じて今回の FSP アジアで学んだことを再確認し、今後やるべきことが明確になりました。FSP アジアでの貴重な体験をぜひ多くの人にしてもらいたいと思い報告書の作成に関わりました。その中でも特に言いたいことは、自分の体で実際に感じなければ他の地域の本当の姿を知ることはできないということです。この報告書をきっかけに初めて海外に行こうと思ってくださる方が少しでもいると嬉しい限りです。ここまで報告書を読んでいただきありがとうございました。（池谷 航）

謝辞

今回の研修で私たちが貴重な経験を得ることができたのは、お忙しいなか私たちのために時間を割いてくださいました企業・組織の皆様、温かいおもてなしと充実した活動を提供してくださった訪問校の皆様をはじめ、本プログラムにかかわるすべての皆様の手厚いサポートのお陰です。心より感謝いたします。

また、海外研修中私たちを導いて下さり事前や事後の研修、班活動等全てにわたり熱心にご指導くださった引率の国際連携機構・川端千鶴さん、事前・事後授業を通じてサポートしてくださった国際連携機構・肖蘭先生ならびに石倉香理さん、現地での案内・コーディネートを行ってくださった後藤田明子様ならびに本学国際交流課・小澤響子さんには今一度感謝申し上げます。

そして最後に、行動を共にし、数々もの感動や学びを共有した最高のメンバーに感謝します。本当にありがとうございました。

2017 年 4 月 26 日

第 19 回 FSP アジア　記録広報班・プレゼンテーション班一同

©2017 国立大学法人北海道大学

一般教育演習（フレッシュマンセミナー）：グローバル・キャリア・デザイン 5
第 19 回ファースト・ステップ・プログラム（FSP）アジア　全体報告書
平成 29 年 4 月 26 日

編　　集：　第 19 回 FSP アジア　記録広報班 （山木、神、福井）
編集協力：　第 19 回 FSP アジア　プレゼンテーション班 （今井、葉柳、近江、池谷）

問合せ先：　北海道大学 国際連携機構 国際オフィサー室（国際交流課）
電話：　(011) 706-8040/8032
Email：　ambitious@oia.hokudai.ac.jp
Facebook：　https://www.facebook.com/1ststepprogram

©2017 国立大学法人北海道大学